

# 第5回 「日本の医療」を展望する 世界目線

～ 相対化で課題を探り、将来を見据える～

多摩大学大学院教授 真野俊樹

## 【中国】医療保険制度と北京の医療機関の現状(1)

中華人民共和国(以下、中国)という、2013年の人口が約13億5700万人(世界1位)、面積は日本の約26倍(世界2位)という巨大な国の医療はどうなっているのだろうか。中国は漢民族(総人口の92%)および55の少数民族からなるが、地方分権が進んでおり、また都市と農村部の差も激しい。ちなみに農村人口は53.7%とされ、65歳以上の高齢者は約1億3000万人である(2013年)。

### 経済における医療の位置付け

国全体の国内総生産(GDP)は日本を抜き、世界2位であるが、1人当たりのGDPは2013年で6950ドルと低く、ジニ係数(社会における所得分配の不平等さを測る指標)も0.473(2013年)と警戒ラインの0.4を上回っている。平均寿命は74.8歳、乳児死亡率は2011年に12.1%と日本の6倍、1970年代前半の水準である。

対GDP比の医療費は5.41%(2012年、国際銀行)と低めであるが、医療の位置付けが独特である。後述するように国民皆保険ではある。しかし、国民にとって医療は高いものであるという認識があるようだ。社会保障という概念がある西洋諸国や日本では、医療は社会保障の一部に位置付けられているが、中国では必ずしもそうではなく、極端な言い方をすれば、お金によって受けることができる医療

が異なる、階層医療といってもいい。

もちろん、医師の技術料(正確には技術料という概念はなく、診察費用)にも差があり、医師によって値段が違う。またVIP(要人)外来が存在し、政府高官や病院幹部等は廉価ですぐに医療を受けることができるようだ。

金銭で最も差が付く部分は薬剤のようだ。院内製剤が充実している中国では、病院が独自に(特に中医では)薬剤を調合(認可は受けている)しているので、安い薬を渡すことができる。その意味で、日本で話題になっているようなジェネリック医薬品は、さほど重視されておらず、病院の薬事委員会にその薬剤が収載されれば、院内製剤と同様に安い薬剤として処方されるようだ。西洋薬で特許期間中のもは当然、高価である。

さらに、多くの病院で国際部が存在し、外国人を診察している。この費用は当然、普通の外来より高額である。もともと中国では混合診療は全面解禁されている。しかし、これらの考え方で政府が推し進めれば、中国の医療は米国と同様に市場化されたものになる。医療の私的財的な要素が前面に出してしまっているといえよう。

2013年では全国の医療機関数は97万4398カ所、うち病院が2万4709カ所(後述する3級1787、2級6709、1級6473)である。医師は279万5000人(人口10万人当たり206人)、で日本の医介補(アメリカ占領下の沖縄に設けられていた医療職。医師不足を補うための代用医師)のような修練のみで医師をしている人を除くと228万6000人と少ない。また看護師数が少ない点にも特徴があり、278万

3000人と増加政策をとっても医師数とまだあまり変わらず、薬剤師39万6000人、リハビリ治療士約2万人と医療専門職が少ない。

### 中国の医療保険制度

極めて簡単にいえば、主として公務員用の公費医療制度、企業の職員や家族のための労働保険医療制度、農村部のための農村合作医療制度からなる。前2者は手厚いが、農村合作医療制度はそうでもない。例えば、前2者と違い、三つ目の農村合作医療制度では薬剤費用は全額自己負担になる。

1990年代以降医療保険制度の再編に向けたさまざまな改革が模索されている。医療については1993～94年、政府による医療保険制度改革案が示されたが、これは「個人医療口座」という一種の強制貯蓄制度をベースとし、かかった医療費の規模に応じて自己負担、さらにリスク分散としての基金を併用する内容のものであった。

そして、1998年末に全国的に統一された新しい医療保障制度が構築され、1999年からこれが実施された。また、2013年には都市従業員基本医療保険加入者が2億7000万人、都市住民基本医療保険加入者2億9600万人、新型農村合作医療加入者8億200万人と、国民皆保険制度を構築したというが、現実にはなかなか厳しいのではないかと考えられる。

また、個人主義(家族主義)の考え方が強いのが中国の伝統なので、どこまで保険を頼るのかという面もよく分からない。



日本の病院管理方式を導入し、日中の専門医が治療プランと医療技術を提供している北京21世紀病院

### 外国人用クリニック

医療をビジネスとしているという視点からは、外国人や中国の富裕層を対象にするクリニックが多くできてくることは想像に難くない。実際、外国人で中国勤務の人も増えており、その人たちの健康管理のニーズは高まっている。このようなクリニックでは、外国人医師で中国の医師国家試験に合格した人も勤務している。必ずしも優しい試験ではないようだが、外国人医師にも門戸は開かれている。こういったクリニックは費用が高額なため、1日当たりにさほど多くの患者を診察する必要がない。医師の待遇も相対的に良いといわれる。

### 北京21世紀病院

日中友好のために建てられた豪華な21世紀ビルの1Fと2Fにある病院である。場所も日本大使館の正面で、日本人が多く居住したり勤務したりしているエリアにある。この病院は1級の病院としての認可を受けている。ただ、現在のところ入院よりも外来に力を入れている。ここの最大の特徴は日本でも有数の病院として知られる亀田総合病院がバックアップしている点にある。すなわち、日本製のMRI、CTも備え、日本の医療輸出戦略の一角を担っている病院ということになる。いわゆる家庭医や小児科、婦人科、美容整形、歯科を備えている。日本人対応が中心ということで、待合室には日本語の本や雑誌が多く置かれていた。また、健診施設も充実しており、VIP用と一般人用の2種類の健診が行われている。

